

人のALDH活性は、「酒に強い人」の1/16となるわけでは

ず。CYP2E1には、c1とc2という遺伝子多型があり、c2を持っていると飲酒によってCYP2E1の誘導が起こりやすく、結果としてCYP2E1の量が増えると考えられる研究者が多いようです。“酒に弱い人でも飲酒を続けると次第に飲めるようになる”ことと関連があるかもしれないと考えられています。しばらく（2～3ヵ月）飲酒を控えるとCYP2E1の量が減り、「酒に弱い人」に戻ります。よく言われていることですね。（保健科学部）

トピックス 1

サッカーワールドカップ

布目寛幸

4年に一度のサッカーの祭典、ワールドカップ（W杯）が終わりはや2か月が過ぎようとしています。なんだか夏休み前に夏休みが終わってしまったような虚脱感を憶えた方もいるのではないのでしょうか？ここでは、日本代表の活躍に沸いたW杯を独断と偏見を交えながらも、極力冷静な目で振り返ってみたいと思います。

予想外？の活躍

「何とかならないものですかね？」とため息をもらす知人（旅行業者）。W杯を目前にした代表チームの迷走ぶりと開催地の評判の悪さから、当初W杯観戦ツアーの申し込みはさっぱりだったようです。かく言う私も「普通にやれば3連敗」と大外れな予想をしていた一人です。ところが蓋を開けてみると、カメルーンDFの初歩的なミスから得たチャンスを生かしW杯初勝利（日韓を除く）をものにすると、デンマークを寄せ付けず予選グループを突破し、ベスト8の座をパラグアイとPK戦で争うという見事なパフォーマンスを披露しました。結果だけをみれば「日本サッカーの大躍進」といえる成果なのですが、正直なところ、

その意見に諸手を挙げて賛成しかねるのです（負け惜しみに聞こえるかもしれませんが…）

目指すサッカーの放棄？

サッカーを齧ったことがある方なら、岡田監督の目指していたサッカーが、細かくパスを繋ぐスタイルで、その原型が今回優勝したスペイン代表やスペインの強豪チームFCバルセロナにあることは一目瞭然でしょう。ところが、彼の在任中、そのようなサッカーがピッチ上で実現されることは一度もなく、W杯で日本代表が披露したものは、ほぼ対極にある堅守速攻型のスタイルでした。

これまでの積み重ねをすっぱり諦め、世界との力関係から、現実路線に180度舵を切った思い切りのいい監督の采配は、評価できるという人もいるでしょう。しかしながら、スポーツを指導する立場から言えば、これはやってはいけないことの一つ初めにあります。直前での大幅な変更は、選手の消化不良と混乱を招くだけに終わる場合が多く、経験の足りない指導者が真っ先に陥ってしまう畏であるといえるのです。これは、大事な試験を翌日に控えて、突然これまでとは違う勉強を始めるのと同じです。こういう場合は、大抵ダメなものです。偶然にも試験のヤマが当たった時には絶大な効果を見せるものです。今回は、新しい戦術に混乱することなく、すばやく適応した選手達をほめるべきなのでしょう。

パスが繋がらない

試合中に選手が、どの程度パスを成功／失敗させているかは、サッカーを研究する一つのテーマでしたが、近年では、FIFAのWeb siteに即時的に掲載されるようになってきました。いくつかの指標は、世界における日本代表の現在位置を鋭く示唆するものがあります。

パスの成功率をみてみましょう。日本代表が過去数年間で目指したスタイルは、パスを高い確率で数多く繋ぐことは求められます。優勝したスペイン代表の成功率は80%、つまり5本中4本はパスが通っていることになります。これに対して、日本代表は60%と、参加32カ国中最下位です。残念ながら、世界を相手にすると日本代表のパスは

ほぼ5分5分の確率でしか味方に渡らないようです。

唯一の例外が、4位になり古豪復活を印象付けたウルグアイです。バスの成功率は下から数えて3番目の62%。おそらく南米の強豪と伍していくために歴史的に（思いつきではなく）このようなサッカースタイルに行き着いたのでしょう。そのウルグアイにしても大会得点王とMVPを獲得したフォルラン（5得点）とハンドでゴールを防いだことで一躍有名になったスアレス（3得点）という世界レベルのストライカーを同時に擁する幸運に恵まれたからこそその躍進であるといえます。

期待されていないからこそ期待できる

大会前に掲載された中日新聞の社説が、今も記憶に残っています。要約すると、「今回の日本代表はほとんど期待されていないが、こういう時は往々にして、良い成績が得られるものである。つまり、今回の日本代表は期待されていないからこそ期待できる」というものでした。今回の結果を受けて、次回ブラジル大会では否が応でも期待は高まることでしょうが、好成績のカギはひょっとすると「期待しない」ことではないのでしょうか？

トピックス 2

イップス (yips)

西田 保

練習では何でもない動きが、試合になると突然ぎくしゃくしてしまう。今までスムーズにできていた動作にプレッシャーがかかると、急にぎごちなくなってしまう。皆さん、こんな経験はないでしょうか。

緊張のあまり手がしびれて円滑な動作が思うようにできなくなってしまう現象を、「イップス (yips)」と言います。スポーツの中でも特にゴルフでよく使用される言葉です。練習場では何でもないショットやパットが、コンペや試合になると

急に打てなくなってしまう。冷凍庫の中で凍り固まってしまう様子に似ているので、「freezing (凍結)」と呼ばれたりもしています。10mの長いパットなら普通に打てるのに、1m前後となると急に腕が石のように固まってテイクバックできないとか、何とか打とうとすると自分の意思とは裏腹にガツンと強く打ってカップをはるかにオーバーしてしまうという非常に不可解な現象です。

さらに説明しますと、オンライン百科事典（ウィキペディア）には、「イップスは、精神的な原因などによりスポーツの動作に支障をきたし、自分の思い通りのプレーができなくなる運動障害のことである。本来はパットなどへの悪影響を表すゴルフ用語であるが、現在では他のスポーツでも使われるようになっている。イップスという用語は、1930年前後に活躍したプロゴルファーのトミー・アーマーが、この症状によってトーナメントからの引退を余儀なくされたことで知られるようになった。この症状を説明するために、ゴルファーの間では「ショートパット恐怖症 (twitches)」「よろけ (staggers)」「イライラ (jitters)」「ひきつり (jerks)」などの表現がされてきた。イップスの影響はすべての熟達したゴルファーの半数から4分の1くらいに及ぶという。アメリカ合衆国ミネソタ州にある大病院、メイヨー・クリニック (Mayo Clinic) の研究者によれば、すべての競技ゴルファーのうち33%~48%にイップスの経験がある。25年以上プレーしているゴルファーにそうなりやすい傾向があるようである。しかし、イップスの正確な原因というのは未だ決め手がない。一つの可能性として、あるタイプのゴルファーに関して言えばそういった現象は加齢に伴う脳の生化学的変化の結果ではないかと考えられている。プレーに関係する筋肉を使いすぎたり、協調や精神集中に迫られることで、問題が悪化する場合もある。また別に、イップスの本当の原因として局所ジストニア (focal dystonia) がその可能性の一つとして言及されることもある。」と紹介されています。

イップスの原因については、これまでいくつか